

異文化理解と社会人基礎力

——異文化を通して見るマネジメント——

Intercultural Understanding and Fundamental Competencies for Working Persons

—Looking at Management through Cultural Differences—

成戸 浩嗣 Koji Naruto

抄 録

現代の日本に生きる我々にとって、「異文化」と関わることなく社会生活を送ることはもはや不可能になりつつある。かつては仕事や留学で外国に行く人々は限られていたし、観光で行ける人々は羨望の眼差しで見られたものであるが、現在ではめずらしくもなくなった。日本人の海外渡航が容易になったばかりでなく、外国から多くの人々が仕事や留学、観光で日本を訪れるようになった。すれ違う外国人の多いことは、かつて「大阪万博(1970年)」の時に会場を行き来する外国人がめずらしかったことを思えば、隔世の感がある。一方、一般の人々が大学で学ぶ機会も容易に得られるようになり、大学で教えられる内容や教育方法も大きく変化してきている。かつてのように専門的な内容を学ぶよりは、学部ごとに設定されたテーマに沿って様々な領域の研究成果を生かした教育が行なわれるようになってきている。このような流れを受けて、愛知学泉大学では、「社会人基礎力」の養成を目標とした教育を行なうという方向性を打ち出してすでに十年以上になり、実習系科目での学内外活動を中心に、教育の様々な場面において学生に対する意識づけが行なわれてきた。「社会人基礎力」とは、もともとは経済産業省が定めた能力の評価基準であり、基礎学力や専門知識とは別に、仕事をする上で求められる基礎的能力を指し、3つの能力「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」およびそれぞれの能力を構成する12の能力要素「主体性・働きかけ力・実行力」、「課題発見力・計画力・創造力」、「発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力」からなる¹⁾。社会人として生きていくためには、「勉強」以外にも必要とされることが数多くある。それらは主に、人と関わることを通じて身につけられるものであるが、「学校」という小世界で生きてきた学生たちにとって、学生でありながらそれらを身につけることは容易ではない。他者と関わりながら学ぶことは大切であり、自分自身の成長をうながすものであるが、その前に「自分と他者は違うのだ」ということを知っておく必要がある。人は多かれ少なかれそれぞれの感覚・価値観をもって生きている。すなわち、自分の世界から外をみることしかできないのであり、本当の意味で物事を「客観的にみる」ことなど不可能かもしれない。しかし、異文化間の相違について知る、具体的には、日本人と外国人、男性と女性、都市と農村、世代間の相違、職業の相違などからくる感覚・価値観、行動様式の相違について知ることは、他者とのよりよいコミュニケーションを行なうことを可能にすると同時に、集団での活動を容易にすることにつながる。「よりよいコミュニケーションを行なう」とは、「たくさん話す」ことではない。それはまず「他者の話を聞く」ことから始まるのであるが、実際に聞いていると、人は自分とはずいぶん違った考え方をするという、当たり前のことに気づかされる。「違う」ことは必ずしも「悪い」ことではないが、自分の感覚・価値観と大きく異なる意見や行動を目の当たりにすれば、とまどいを覚えるのはもちろんのこと、ネガティブな感情が起こってくるのが常である。また、日本では「このような場合にはこうするのが常識である」とされていることが、別の国では「絶対にそうしてはならない」とされていることもある。このような場合にトラブルを避けるためには、あらかじめ相手の社会について知っておくことがずいぶんと助けになる。

本稿は、筆者がこれまでに「異文化」をテーマとしたゼミや講義で行なってきた内容をもとに、異文化理解の意義やアプローチの仕方、それらが「社会人基礎力」の育成にどのような面でプラスとなるかについて考えることを目的とする。

キーワード

- | | |
|-----------|--|
| 1 異文化理解 | intercultural understanding |
| 2 社会人基礎力 | fundamental competencies for working persons |
| 3 前に踏み出す力 | ability to step forward |
| 4 考え抜く力 | ability to think through |
| 5 チームで働く力 | ability to work in a team |

目次

- 1 身近な「異文化」
- 2 外国と日本
- 3 異文化理解の意義
- 4 講義の内容・手順
- 5 様々な視点をもつことの大切さ
- 6 おわりに

1 身近な「異文化」

日本人同士の関わりにおいても、「異文化」と呼べるものは存在すると言ってよい。例えば、居住する場所が都市か農村か、企業に勤めるサラリーマンか自宅で農業を営んでいる人か、勤めていても企業人か公務員か、出身地がどこか(ex. 関東 or 関西、北陸 or 東海、尾張 or 三河)、男性か女性か、どの年代層の人であるかなど、異なる生活感覚や意識をもった人々の間で「異文化」は存在するであろう。文化の相違からくる違和感や驚きは、日々の生活の中で誰もが体験しており、平凡な日常生活の一部と言えるものも多い。例えば、農業とは関係ない仕事をしている人々は雨が降れば喜ばないが、農業従事者にとっては「恵みの雨」ということもある。農村に住んでいる人は結婚式の披露宴に「ご近所様」を招待するが、都市部に住んでいる人の場合には少ないであろう。平野部の尾張地方と山間部の三河地方では昔から「商業地帯と農業地帯」という明確な違いがあり、気質も異なるとされてきた。男女はそれぞれに特有の感覚、思考法を備えており、それぞれに長所がある反面、両者の間でコミュニケーションの際に行き違いが生じることはよく知られている²⁾。年代差からくるギャップも、親子間のそれをはじめとし

て日々の生活においてしばしば表面化するものである。このようにみていくと、「異文化」との接触は身近なものであるということが改めてうきぼりとなってこよう。但し、他者との接触の中で相手に違和感を覚えたり、相手との行き違いや衝突を経験したりした時に、これらを「出身地の違いからくるものだ」あるいは「男女の性差からくるものだ」などと明確に判断できないことも多い。同じ家庭に育った兄弟姉妹がそうであるように、各人には固有の「性格」があり、人の思考や行ないは性格と一体となって表面にあらわれるからである。しかしながら、人間の感覚・価値観や考え方、行動様式を形成する上記の様々な要素について知り、それらを他者とのコミュニケーションに生かすことは、人や物が短時間で広範囲に行き来する今日ではますます強く求められるようになっていっていると言えよう。また、他者を観察・分析することは、必然的に自分を観察・分析すること、ひいては自他の関係を客観的にとらえることにもつながる。このことは個人レベル、集団レベルを問わずあてはまる。

以上のようなことについて受講者に興味をもたせ、考えてもらうための教材として筆者が用いているものの一つに、原沢 2013 がある。同：30-32 には、「日

本文化」についてのイメージがどのようにとらえられているかについての興味深い記述がなされている。すなわち、「日本文化」を「見える文化」と「見えない文化」に分け、氷山の水面に出た部分を前者、水面下に沈んだ部分を後者として、様々な事物がいずれに属するかが示されている(両者の中間に位置するものもある)³⁾。その上で、いくつかの項目について、それらを「見える文化」、「見えない文化」のいずれかに振り分けるというチェック問題がついている。このような作業を普段行なうことはまずないので、受講者はとりあえずやってみるのであるが、大切なことは、いずれであるかの判断が正しいかどうかよりも、自分がなぜそのように判断したのかということである。とりわけ、両者の中間に位置するものとして示されている「冠婚葬祭」、「近所づきあい」などについては、なぜそのように判断したのかだけでなく、どの部分が「見える文化」あるいは「見えない文化」なのかを説明できなければならない。「異文化」をキーワードに身近な事物について考えることは、広い世界を観察する力を養うための第一歩なのである。

2 外国と日本

「異文化」についてとり上げる場合、通常は「外国(人)と日本(人)」というレベルで語られることが多い。この点については、成戸2002、同2008、同2010でとり上げ、筆者が2～4年生のゼミ・卒論指導を行なった内容を紹介したほか、同2009においてはフランスのアミアン市およびパリ市でのコミュニティ研修(1週間)についての報告、同2017においては台湾の花蓮市にある「慈済科技大学」での夏季短期研修(2週間)についての報告を行なった。フランス、台湾での研修においてはそれぞれ固有のテーマがもうけられていたが、研修で海外に行くことそのものが異文化を体験する格好の機会となる。本学では、中国北京市の「北京第二外国語学院」、台湾花蓮市の「慈済科技大学」のほか、韓国烏山(オサン)市の「烏山大学」、カナダバンクーバー市の「カピラノ大学(Capilano University)」との交流協定にもとづいた教員・留学生の交換(長期・短期)も行なわれており、その気になればいくらかでも異文化体験ができるようになってきている。但し、自分が訪れる国について何らの予備知識もなく、「異文化」について特に意識することもない場合には、無用のショックを受けたり、

人によっては「あんな国、二度と行くもんか！」となりかねない。異文化との関わりにおいては、「衝突→理解→受容」のように進んでいくのが理想ではあるものの、その前提として自分が訪れる国の事情についてあらかじめ一定の知識を備えておくことが必要である。

外国文化と接触した場合に生じるとまどい、摩擦、衝突の事例については、成戸 2008、同 2010 で紹介した。これらの具体例はいずれもそれぞれが属する社会のあり方や価値体系の相違から生じたものであるが、表面的にはその場で出くわした単発の出来事としてあらわれる。例えば、「人前で靴を脱ぐのは失礼か?」、「約束の時間に遅れていくのはマナー違反か?」、「麺類を音を立てて食べるのは不作法か?」などの生活面における問題から、「野菜の大きさが揃っていないければ商品価値はないのか?」、「レストランで生野菜を出すのは問題か?」、「食事の接待ではできるだけ多く食べてもらい、飲んでもらうようにする方がよいか?」、「ユーモアのつもりで作成した商品のポスターに現地の人々が激怒したらどうするか?」などのビジネス面における問題までが、様々な場面で表面化する。大切なことは、こうした個別の事例を知ったり、自分が体験したりした時に、「なぜこのような摩擦、衝突が起こるのか?」を考える力を養うことであろう。そのためには、上記のような事例に登場するそれぞれの国の歴史や社会の成り立ち、現在の状況について知っておくことが大切である。大変なことのようであるが、全く知らない場合と少し知っている場合とでは展開が大きく異なってくるはずであり、少なくとも、外国に行った時に現地でタブーとされている行為をしてトラブルとなるようなことは避けられよう。

3 異文化理解の意義

海外研修や留学は、社会人基礎力養成の格好の機会である。他者から意識づけされるまでもなく、日々の生活において意識や価値観の切り替えが求められるからである。自分で考え、行動しなければ何一つ進まないし、そもそも海外に出るということ自体がすでに「前に踏み出す力」を発揮したことになる。長期留学の場合には、現地の言語をある程度習得してからでなければ効果は期待しにくい。日々の生活においては現地の言葉によるコミュニケーションが不可欠であり、おのずとコミュニケーション力が磨

かれる。買い物や、公共交通機関による移動をはじめとして、現地での生活に必要な情報を得るには自分から人に尋ねることなしには何も進まないため、「働きかけ力(他人に働きかけ巻き込む力)」も自然と身につく。たとえ消極的な性格の人であっても他者との接触は不可避であり、否応なしに自分から行動を起こさざるを得ない(外出してトイレに行きたくなった時、消極的な性格の人が我慢して一日過ごすだろうか)。一方、短期留学(or 研修)の場合には、語学習得が目的であるにせよ、交流をはじめとする現地活動が目的であるにせよ、「参加者の意識が変わる」ことが最大の収穫となる。例えば、成戸2017で紹介した「慈済科技大学」での“Service Learning”の場合、研修中の使用言語は英語であり、日本、中国、タイ、マレーシア、ベトナムなどから様々な専攻の学生が参加し、学内での研修のほか、花蓮市内の退役軍人高齢者施設の慰問、リサイクルステーションでの資源ごみ仕分け作業などに参加した⁴⁾。このような活動を通してでなければ人の意識は変わらない。また、同研修の中には、短時間ではあったが初心者向けの「中国語レッスン」が組み込まれており、これをきっかけに帰国してから中国語を学び始めた者もいた。初心者であるか否かを問わず、帰国後に高いモチベーションをもって外国語学習に励むようになったケースである。

外国での様々な経験は、「日本の常識が外国での常識とは限らない」という当たり前のことに気づかせてくれる。「日本人は時間にうるさく、集団で行動する時や車を運転する時には人が変わり、言っていることと考えていることが違う」などとよく言われる。このようなことは、日本人の間ではとり立てて問題とはされないが、外国人の側からみた場合には目立った特徴となる。これらの点に気づくことをはじめとして、日本(人)の姿を外から見る習慣を身につけることは、外国(人)について知ることと同様に大切である。

ところで、筆者の専門は、一般に「中国語学」とよばれているものである。より厳密には「日中対照言語学」であり、主に「統語論(文法)」の領域に属する。このほか、日中2言語とフランス語との対照作業にも手を染めており、「進行表現(～シテイル)」や「使役表現(～(サ)セル)」、「可能表現(～(ラ)レル／～(スルコト)ガデキル)」にみられる3言語の対照研究を行なっている。意味的に対応する3言語の表現形式を比較することによって、コトガラのとらえ

方の相違を明らかにしようとするものであるが、このような言語の対照作業から得られた知見は、異文化間の相違の一端を記述することにつながるものであり、ひいては比較文化論の発展にも寄与し得るのである。研究面においてはこのような高い目標を設定しているわけであるが、教育の場においてこれらをどのように学生に還元していくかという問題も大切である。この点については、筆者が担当する「問題解決基礎」なる講義についての紹介を通して述べることにする。この科目は、愛知学泉大学現代マネジメント学部の1・2年次生が2年間の4セメスターにわたり「問題解決基礎1・2・3・4」のように積み上げ式で受講するものであり、社会の様々な現象から課題を発見し、それを解決する力を養うことを目的とする(筆者が担当するのは1年次の秋セメスター「問題解決基礎2」)。社会で問題となっていることは、簡単には解決ができないものばかりである。例えば、「沖縄をはじめとする日本国内の米軍基地問題」、「死刑制度廃止の是非」、「原発廃止の是非」、「一票の格差問題」、「集団自衛権を認めるべきか否か」など、どれもこれも簡単には結論が出ないもの、あるいは結論が出そうにないものばかりである。個々の人間にとってはあまりにも大きな問題であり、「賛成か反対か」を表明することはできても、それが正しいかどうかの自信までは持てないことの方が多いのではなかろうか。しかしながら、大学で学ぶ目的とは、たとえ知識や情報が少ないテーマであったとしても、それまで自分が培ってきた見識と判断力によって自分なりに考え、意見を述べる力を養うことのはずである。大学をとりまく環境がどのように変わろうとも、この点是不変であろう。しかしながら、何らの予備知識もない受講者にいきなり「こんな問題がありますが、みなさんどのように考えますか?」と問いかけたとしても、議論どころか理解することも困難ということになりかねない。要は「自分で考え、それを発表する」力を養うための訓練をスタートさせればよいのであり、卒業研究(卒論)にとりかかる段階では上記のような大きなテーマに取り組むにせよ、入学したばかりの1年生に対してはそれにふさわしいやり方があるはずである。そもそも日本社会では積極的に自分の意見を言うことが一般的であるとは言えないし、必ずしもそれをよしとしない精神土壌もある⁵⁾。「問題解決基礎」の講義においては、筆者ともう一人の教員が1年生受講者を半数に分け、1回目は2名の教員によるオリエン

テーション、2回目以降はそれぞれが半数の受講者を7回ずつ担当し、7回目が終了した時点で受講者を入れ替える。受講者は2人の教員からそれぞれ7回ずつ受講することとなる。筆者の担当部分は、「異文化に関する問題」を材料として、他者とコミュニケーションする際に必要な姿勢や心構えを学ぶ時間であり、今一人の教員の担当部分は、身近な「問題解決」のための訓練として、「学内イベントの企画」を行なう時間である。このため、受講者の側からみれば、知識と実践が組み合わさった形となっている。社会人基礎力の12の能力要素のうち、他者とのコミュニケーションに際して求められるものとしては、「発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)」、「傾聴力(相手の意見を丁寧に聴く力)」が最初に挙げられようが、まずは後者の「傾聴力」である。人の話を聞くところからコミュニケーションは始まるからである。自分と異なる考えを他者が述べた時には、多かれ少なかれストレスを感じ、「何を言っているんだ!」となるのが人間の性(さが)であるから、「ストレスコントロール力(ストレスの発生源に対応する力)」も必要となる。ちなみに、何はともあれ与えられたテーマについて話をすすめるやり方は、外国語のエクササイズでも用いられる。複数の参加者がそれぞれ自分の好きな話題をカードに書き、インストラクターがそれらを集めて全員で一つ一つのテーマについて会話を進めていくというものである。大切なのは、話を始めるきっかけである。コミュニケーションの過程では、意見を述べない人に対して自分の考えを述べるようながすことも必要である。「働きかけ力」である。このような作業を繰り返し、いよいよ複雑なテーマについてのディスカッションが可能となった段階で、はじめて「課題発見力(現状を分析し目的や課題を明らかにする力)」を身につけるチャンスが出てくる。常日頃から外の世界に対してアンテナを張っておれば「課題」なるものはいくらかでも見つかるが、そのような習慣がなかったり、無関心であったりする人の場合には意識を変える必要がある。これまでに示した社会人基礎力の下位概念である様々な力は、実際には長期にわたって少しずつ身につけていくものであり、把握が難しいこともあるが、「〇〇力」のようにネーミングすることによって可視化され、受講者がこの講義で身につけるべき力をイメージする助けとなるのである。

4 講義の内容・手順

異文化をテーマとするゼミ・卒論指導で行なった内容・手順については、成戸 2008、同 2010 でモデルを示し、この十数年の間、少しずつ形を変えながら現在にいたっている。但し、「問題解決基礎」においては受講者に対する講義回数が7回であることや、15回のすべてが「異文化」をテーマとしているわけではないことから、これにふさわしい仕様に改める必要があった。以前のように、「外国(人)と日本(人)」というテーマを正面にすえて受講者に様々な事例を紹介し、課題発見や解決方法を模索するというような時間的余裕はなく、このテーマに対して興味を覚えるかどうか人もによって様々である。このため、「外国(人)と日本(人)」を副次的なテーマ、身近な人とのコミュニケーションを前提とした「自分と他者」をメインテーマとして、毎回作業を行なう時間をもっている。手順は以下の通りである。

①異文化との出会い

(要旨)

異文化との出会いは人間的成長の機会であることを知り、このことと「社会人基礎力の養成」との関連性について理解する。身につけるべき能力要素としては、第一に「柔軟性(意見の違いや立場の違いを理解する力)」が挙げられる。主たる使用教材としては原沢 2013:19-26 を使用する。

(作業)

原沢 2013:23-24 に掲載されている「ワーク 1」を使用する。自分を知ってもらうため、自分の姿(ex. 性格、価値観、人生観など)を絵で表現して受講者相互で見せ合い、それぞれの個性の違いを知る。

②「文化」とは何かについて

(要旨)

第1章で紹介した原沢 2013:30-32 の内容を中心とし、「日本文化」の中にも見える部分と見えない部分がある(文化は本来そういうものである)ことを知る。自分の常識が他者の常識であるとは限らないこと、それを知った上で意思疎通・協力することの大切さを知る。これは「チームで働く力」を身につけることを意識している。

(作業)

「日本文化」に属するとされる様々な事象を「見える文化」、「見えない文化」、いずれにも解されるものに分類することを通して、文化は様々な形であらわ

れることを知る。自分の常識が通用しなかった経験を書き出してみる。

③「自己開示」について

(要旨)

「自分」に興味のない人、自分が他者からどのように思われているか気にならない人は少ないと思われる。誰もが関心をもつ「自分」について考えることで、受講者の「異文化」についての興味を高める。方法としては、「ジョハリの窓」について紹介し、「自分と他者」について意識させるようにする⁶⁾。「ジョハリの窓」は、自分について、「自分が知っている部分」、「他者に知られている部分」、「自分が知らない部分」、「他者に知られていない部分」を組み合わせ、

- ・「自分が知っており他者にも知られている部分」
- ・「自分は知っているが他者には知られていない部分」
- ・「自分は知らないが他者には知られている部分」
- ・「自分も他者も知らない部分」

の四つの領域を設定し、どの領域が大きいかによって「自己開示」の大小をはかるのに用いられる。自分についてどの程度他者に開示するか、開示の方法についても文化ごとの差異が認められることを知り、コミュニケーションに生かせるようにする。例えば、初対面の自己紹介において、中国人は相手の収入について話題にし、韓国人は相手の年齢や結婚しているかどうかまで尋ねることがあるが、これも自己開示の大小と関わりがあるということができよう。身につけるべき「社会人基礎力」の能力要素としては、「状況把握力(自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)」が挙げられよう。主たる使用教材は、徳井 2002:18-29、原沢 2013:155-165 である。

(作業)

「ジョハリの窓」を作成してみる。この作業は一人ではできないものであり、受講者によっては周囲に「自分」についての情報提供をしてくれる「他者」がいないこともあるので、臨機応変に行なう。例えば、「君ってこんなところがあるね」と言われたが自分では意外に感じたような経験を思い出して「自分は知らないが他者には知られている」の欄を埋めるというようなことである。ちなみに、「自分は知らないが他者には知られている部分」、さらには「自分も他者

も知らない部分」に該当する項目があるとすれば、それは受講生が自分の「潜在能力」を発見するきっかけとなる可能性がある。

①～③が終了した段階で、「異文化」について学ぶ意義を知り、興味をもつことができれば成功であるといえよう。この段階では、補助教材として成戸 2008、同 2010 も適宜使用する。人によっては「外国(人)には興味がない」こともあるし、「変なことばかりやっている」と感じるようであるが、それも最初のうちだけであり、最終的には「自分と他者」の関係をよりよく築き、コミュニケーションをとるための武器としてこれらの知識が役立つことを理解してくれるようである。以下の④からは、主としてビジネス活動における異文化の問題をとり上げる。成戸 2008:102-103、同 2010:119-124 でいくつかのケースを紹介しているが、情報の新鮮さを担保するために新聞記事なども活用する。必要に応じてグループごとに意見を交換し、話し合った結果を発表してもらうようにする。

④異文化に関する知識の有用性(その1)

(要旨)

ビジネスの世界では、異文化との出会いによるとまどいや摩擦が日常茶飯事であり、それは商品の形態、色、ネーミング、広告の出し方にまでおよぶ。成戸 2008、同 2010 でとり上げたケースを含めて以下に列挙する。

- ・「カップヌードル」はアメリカでは5センチ程度にカットされている(箸を使う習慣がないためと、食べる時に音がしないようにするため)。
- ・韓国の洗濯機には「煮る」という操作ボタンがある(ひどい汚れ物は煮てきれいにするという習慣があるため)。
- ・中国では生鮮食品の大きさを揃えることに日本ほどこだわらず、形状による値段の違いはない(小さくカットして調理することが多く、大きさや形状があまり問題とはならないため)。
- ・中国のある県と白菜購入の契約を結んだ日本のビジネスマンが、収穫された白菜の色や大きさにクレームをつけたところ、トラブルとなった(真っ白で大きすぎる白菜は、日本では売り物にならないため)。
- ・台湾に出店したトンカツ専門のレストランチェーン店が日本でのやり方と同様に生キャベツと一緒に

にトンカツを提供したところ、クレームが殺到した(生の野菜は家畜のエサであると考えられているため)。

- ・日本企業が中国の顧客向けに作成した商品(自動車・塗料)ポスターが、神聖な獅子や龍を冒瀆するものであるとしてクレームがついた(トヨタの車に獅子が敬礼したり、龍が柱に巻き付いたまま滑り落ちている姿が問題となった)。
- ・マレーシアで販売されるグリコの“Pocky”は“Rocky”に改められている(イスラム教で忌避される「豚」に関係する英語の“porky(豚のような)”を連想させるため)。
- ・日本企業の生産した魚類の缶詰が中東の国々では売れなかった(暑苦しい太陽のマークが敬遠されたため)。

いずれも現地の人々の感覚・価値観をどれだけ知っているかがビジネスに直結するものばかりである。トラブルが発生した場合に、実際にどのように解決が図られたかは非常に重要である。全面的な謝罪が必要である場合もあり、謝罪とともに、日本企業側のやり方に理解を求め、受け入れてもらえるような方向にもっていく場合もある。上記の例はいずれも日本商品を海外で製造・販売しようとするケースであるが、海外旅行をあつかう観光業であれば、日本人観光客に対し、現地でのトラブルを避けるための注意事項をあらかじめ伝えておく必要がある。日本に海外からの人々を受け入れる場合も同様であり、例えば、最近ではよく知られるようになった、「ハラル認証」を受けたイスラム教徒向けの食材の話がよく知られているほか⁷⁾、日本を訪れる外国人観光客がコンビニなどでトラブルを起こした事例が新聞などで報じられている。後者については、かつて日本人が「エコノミックアニマル」と揶揄されていた時代に、日本人観光客が海外での集団行動の際に、現地の人々が眉をひそめる行動をとっていたことと重なりそうである。

上記の例のうち、トラブルとなったケースについては、その原因をいち早く突き止めることが必要であり、「課題発見力」が求められる。商品が売れなかったり、クレームが殺到したりしても、すぐには原因がわからないことも多い。「ストレスコントロール力」が必要とされるのは言うまでもないが、かつての日本のように「お客様は神様」式にひたすら謝るのも効果的とは限らない。トラブルの原因がなくな

らない限りは、同様のことが繰り返されるばかりであり、得られた情報をもとに根本的な解決策を編み出すための「考え抜く力」、それを現場で実現するための「実行力(目的を設定し確実に行動する力)」が求められる。一方、異文化に対してアンテナを張っておくことは、異なる文化の人々に対する配慮であるにとどまらず、ビジネスチャンスにつながることも少なくないと考えられる。異文化からヒントを得て新商品を開発することも可能であろう。例えば、中国の上海にコンビニを出店させる場合、そこで販売する「弁当」はどのようなものにすべきか。かつて「ローソン」の事例がテレビ番組で紹介されていたが、最初に行なわれたのは、現地の人たちの食習慣を知るために市場を見て回ることであった。また、1971年に日清食品が発売した「カップヌードル」は、手軽に食べられるカップ麺の先駆けであり、発売当初は透明なプラスチック製のフォークで食べるというスタイルが当時の若者の圧倒的な支持を得たものである(環境保護の考え方が広まった現在ではこのスタイルはNGであろう)。商品を「ヌードル」とよび、それまで用いられなかったフォークで食べるというスタイルは、日本文化の発想からは出てこないのではなかろうか。

⑤異文化に関する知識の有用性(その2)

(要旨)

異文化について語る際には、個人レベルの事例が多く挙げられるが、個人で活動する場合に直面する問題は、集団で活動する場合にも表面化することが多い。「社会人基礎力」の能力要素の中には「規律性(社会のルールや人との約束を守る力)」があるが、文化が異なればルールそのものが異なることもめずらしくない。例えば、「約束を守る」とは言っても、「約束の時間」をどのようにとらえるか、すなわち「10時に会いましょう」と約束した場合に「きっかり10時」なのか「10時前」なのか、あるいは「10時より遅れてもよいのか」などや、何らかの理由で遅れるとしたら、どれぐらいまでが許容範囲であるのか、というような点で異なってくる。日本人はどちらかといえば、このような違いからくるストレスに弱いのではなかろうか。客として店に入って物を買う際に、店員がすぐに来ないとイライラする傾向も強いようである。これらはすでに感覚と一体化してしまっており、理性ではコントロールしにくい面もある。しかしながら、自分の属する社会を一步出れば、そ

こは異なるルールによって支配されているわけであるから、当事者は何らかの妥協点を見いださなければならない。また、異文化との出会いには、自分が他文化に入り込むケースと、自分たちの文化に他文化出身者が入ってくるケースがある。いずれのケースにおいても、入ってきた人に対し、その文化集団の中で過ごすための留意点をあらかじめ伝えておくことが望ましい。このことは、その人が異なる文化集団において「チームで働く力」を発揮するためにも不可欠である。わかりやすい例を挙げれば、かつて中日ドラゴンズにアロンゾ・パウエルという選手がおり、長く活躍していた。彼の後に中日に来た外国人選手が短期間に日本のプロ野球チームになじんで実力を発揮できたのは、パウエル選手のアドバイスに負うところが大きいと言われていた。このようなケースから言えることは、異なるルール(=価値観)で動いている集団に入って活動を行なう場合には、その集団に入る側、受け入れる側の双方に通じたキー・パーソンの存在が重要であるということである。外国で操業する日本企業の場合、それは現地の事情に詳しい日本人でもよいし、日本の事情に詳しい現地人でもよい。要は、双方の橋渡し役となる人間が必要ということである。中日におけるパウエル選手はそのような存在であったかと思われる。ついであるが、同じく大学における学生組織であっても、運動部と学生会(or 大学祭実行委員会)とでは組織の活動原理が異なるであろう。運動部のメンバーは常に高い集中力を求められ、緊張感を欠いた態度でいることは事故やケガ、試合中のミスにつながりかねないため、厳格な「規律性」が求められる。日々ストレスとの戦いである。チームの目的は、「試合での勝利(できれば優勝)」と明確である。脱落者も出る。学生会(or 大学祭実行委員会)はどうであろうか。自治組織であり、学生の利益のために活動する組織である点でその目的は明確である一方、一年生でも一人前の仕事を任されることがある(これは全体のメンバー数にもよる)。大学側や学外との交渉ごとも多い。「ストレスコントロール力」が必要となってくるが、このストレスの質はスポーツチームのそれとは異なるものである。学外の人々や組織と交渉する際には、当然ながら社会人としての態度・行動が求められるし、それが金銭の授受をともなうものであればなおさらである。かつて、筆者のゼミ生の一人に、サッカー部のマネージャーと大学祭実行委員会メンバーとを掛けもちでつとめていた女子学生がい

た。当時2年生であったその学生は、「異文化」をテーマとする筆者のゼミの期末レポートとして、自分が所属する二つの組織の活動原理の違いについて書いた。実体験をふまえたそのレポートを興味深く読ませてもらった記憶がある。

⑥異文化に関する知識の有用性(その3)

(要旨)

⑤に続いて、集団で活動する場合にみられる文化的相違について学ぶ。主たる使用教材としては『異文化コミュニケーション・ハンドブック』:170-179を使用し、異なる文化の間にみられる組織のあり方や活動原理の相違について知ることを目的とする。日本では、同じ職場で働く者同士が協力し合い、全体の仕事の流れから今自分が何をしなければならないかを察することが求められるため、上司が細かな指示をしなくてもよいのに対し、欧米や中国では細かな具体的指示が常に必要とされるようである。例えば、工場で従業員に対し「このネジをしっかりと締めて」と指示するか、「このネジをドライバーで右に5回以上締めて」と指示するかの相違である。前者は「アナログ型コミュニケーション」、後者は「デジタル型コミュニケーション」とよばれ、日本では前者が、欧米では後者がそれぞれ多いようである(もちろん、同じく日本の組織であっても、企業、官公庁、NPO 団体のような組織形態の相違によって活動原理が異なることも考えられるが、この点はひとまずおく)。前掲教材はさらに、組織原理のタイプとして林 1994:57 の記述を引用し、組織の中で各成員が担う役割が明確に規定されている「M型組織」と、そうではない「O型組織」の相違が、休暇のとり方の違いと関わっている点について述べている⁸⁾。前者の場合、ある人が休暇をとっても周りの人々の負担が増えることはないのに対し、後者の場合には負担が増えることとなるため休暇がとりにくいとされる。様々な要素がからむ人間社会の諸現象を理論化するのは難しく、このように簡潔な分類ができるのかどうか気になるころではあるが、林 1994 の内容は80ヶ国を調査した結果であり、日本は世界的に見ても特異な「O型組織」とされ、「O型組織」では各成員に割り当てられた仕事のほかに「グリーンエリア」が存在し、そこで仕事が発生した場合には周囲の成員の誰かがそれを引き受けるのに対し、「M型組織」では「グリーンエリア」は存在しない。「グリーンエリア」が存在するか否かが二つの組織タ

イプの相違であり、これによって仕事のやり方、意思決定方法、実行方法、責任のとり方、人事管理のあり方などが異なってくる。また、「M型組織」ではトップの決定した目標や方針が下部組織の成員に伝えられるのに対し、「O型組織」ではその反対方向の流れでものごとが決まるという形をとる⁹⁾。対外的な関係においては、『異文化コミュニケーション・ハンドブック』:177-179に、ビジネス交渉が行なわれる場合に交渉担当者に全権が与えられているか否か、交渉開始の段階で相手との相違点を前面に出しておいてから妥協点を探るか、あるいは相手との信頼関係を先に築いてから交渉を始める方法をとるかという交渉スタイルの相違が紹介されており、日本企業の場合には担当者に決定権がないことが多く、交渉内容よりも相手との信頼関係を築き、共通点を見いだすことにまずは力が注がれるとされている。また、交渉成立後の契約書作成にあたって、日本の契約書には最後に「契約書に盛り込まれていないことが生じた場合には両者が誠意をもって話し合う」という但し書きがつくことが多いが、これには「契約が絶対的なものではなく、状況次第では内容を変更することもあり得る」という考え方があらわれており、契約が履行されない場合には訴訟を起こすという考え方はかなり異なる。ちなみに、④で挙げた中国での白菜購入をめぐるトラブルの場合には、それ以後は契約の際に一個あたりの重量・成熟度を明示し、「白菜」ではなく「三色菜(緑・黄・白)」というようにした。日本企業と外国企業との交渉では、以上のような交渉スタイルの相違から行き違いや誤解、衝突が生じることもめずらしくないと推察される。

異なる文化に属する人々の間には、個人レベルで見られる感覚・価値観の相違が、集団で活動する場合にもみられるであろうことは想像に難くないが、実際に組織の中に入って活動してみない限り具体的なイメージはわきにくいであろう。しかしながら、組織のタイプに違いがあること、それらの活動原理の相違について知っておくことは、受講者が卒業後に外資系企業や外国企業で働くことになった場合はもちろん、日本企業の成員として外国企業との取引や交渉にあたるようになった場合にも役立つはずである。外国との関わりが多い業種としては、かつては旅行業、貿易業、航空業などが思いうかんだものであるが、現在ではあらゆる業種におよんでいる。身の回りの生活用品や衣料品・食料品、玩具、住宅用建材、さらには仏壇にいたるまで外国製品がめず

らしくない。日本国内の就職先を探すにしても、もはや「日本スタンダード」だけではやっていけないというのが実情である。

⑦異文化に関する知識の有用性(その4)

(要旨)

異文化について学ぶことの最終目標は、卒業後に受講者が所属することとなる職場の組織にできるだけ早くなじみ、貢献できるためにはどうすればよいかを考える力を養うことである。「社会人基礎力」という名が示す通り、現在は学生であっても、在学中に意識を少しずつ変えていくことによってそれは可能であると考えられる。もちろん、職場組織が人間の集団であり、人間というものが理性のみで行動するとは限らない(人間は感情の動物である)以上、理詰めで物事を処理しようとしても限界を感じることはあろう。それらについては働き始めてから学べばよいことである。また、「コミュニケーションが苦手」という学生に対して、筆者は「君はまだ20年そこそこしか生きていないぞ。これからいくらでも変わる」と言う。世に「年の功」という言葉があるように、数十年単位でみればいくらでも成長する。但し、現在は「無限」にある可能性も、ひとたび自分が進む道を選択すれば「一本道」を歩くこととなるため、学生のうちに「よりよい選択」ができるような知識・見識を身につけておかなければならない。自分の人生の道を選択するのに「計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)」は不可欠である。

ところで、大学に入学した新入生が「高校とは違う」と感じるのは、どこも同じであろう。大学内に人は大勢いるのに孤独を感じやすいのも、「クラス」がないことをはじめとして高校とは異なる組織原理で動いていることによる。「身近な異文化」と言えるかも知れない。同じ高校出身者がいればまだしも、遠方の大学に入学した場合にはそのようなことも少なく、孤独感が強い。人間はそれまでとは異なる環境に置かれるとストレスを感じるものである。学生であれば、大学という環境に身を置くことのほか、入学にともなう引っ越し、一人暮らしを始めるなどで様々なストレスを抱え込むこととなる。どのような環境変化がどの程度のストレスをもたらすかということが心理学の分野でとり上げられるが、当事者としてはそれを乗り越えてゆくしかない。大学生活で体験するこのような変化のうち、大きなストレスが想定されるものの一つが外国留学である。留学に

はもちろん「将来の夢」がとれない、留学先での楽しい体験や感動もある。前述したように、本学では、中国の「北京第二外国語学院」、台湾の「慈済科技大学」、韓国の「烏山大学」への長期留学(公費・1年間)が可能である。長期留学にはリスクもある。リスクの一つとして、まずは環境の変化にどれだけ耐えられるかということが挙げられる。例えば、ある学生が1年の外国留学をすることになった場合、自宅通学生と一人暮らしの学生とでは留学生活に入った場合のストレスが異なり、前者の方が大きなストレスを感じるのが通例であろう¹⁰⁾。また、日本とは異なる気候風土に加え、食事や水も異なり、水でもそのまま飲めるかどうか(軟水 or 硬水)などの違いもある。町に出ても公衆トイレに扉がなかったり有料であったりする。様々な理由から途中で挫折し、いわゆる「留学生くずれ」になるケースもある。一方、留学生生活を順調にこなした学生は、その顔つきでわかる。話してみるとさらに成長のほどがみてとれる。こちらとしてはうれしい限りである。成長の仕方は人にもよるが、一種の「凶太さ」のようなものが共通してうかがわれる。いやな体験もしたであろうに、それを面白そうに話す。留学生活はいいことづくめではない。むしろ生活に関しては便利すぎる日本を離れるのであるから不満を覚えることの方が多いが、「ストレスコントロール力」を身につける格好の機会でもある。この力は、「ただひたすら耐える」ための力ではない。むしろ、本来であれば負の感覚であるストレスをストレスとせず、自分自身が「寛容さ」を身につけることにつながるものである。「日本スタンダード」をいったん捨て、現地のスタンダードに従って行動してみると、思わぬ収穫がある。例えば、日本では人から短所と見なされてきた自分の性格の一部が、他国では長所とされることを知るというようなことがある(その逆もある)。より具体的には、日本では「いいかげん」としてマイナス評価をされるのに対し、別の国では「おおらか、寛容」とされるというようなことである。また、物事を様々な視点からながめ、考えることが自然にできるようになる。一方、日本人は概して物事に細かいとされるが、これには良い面がたくさんある。この点は、日本人の緻密な仕事ぶりを外国人が高く評価することによっても理解できよう。但し、現代社会に生きる我々にとっては、こうした日本人がもつ優れた特性を維持しつつも、日本以外の文化を知り、コミュニケーションをとる術(すべ)を身につけることがこれから

ますます必要となっていくであろう。前述したように、異文化について知ることは、ビジネスチャンスにつながる可能性を秘めているのである。

5 様々な視点をもつことの大切さ

第4章では、「異文化」をテーマとした講義の進め方について紹介したが、これらの内容は、「自分と他者は異なる。どのように異なるかを知った上で付き合うことが大切である」という言葉に集約される。言うのは簡単であるが実践は難しい。知識などというものは、その気になればいくらでも身につけることができるが、価値観や考え方、活動原理となるとそうはいかない。しかしながら、我々が社会生活を営むにあたって他者との関わりは不可避であり、生きる喜びもそこに見いだされる。世の中にはいろいろな人々があり、自分と同じ価値観・考え方の人などいないと思った方がよい。むしろ、異なるからこそ面白いのである。人との新たな出会いを経験し、新しい価値観や考え方を知った時には、驚きや違和感ばかりでなく、新鮮さが感じられることも多いはずである。そのような経験をすることで人間は徐々に変わっていく(変わらざるを得ない)ものであり、「柔軟性」を身につけていくとともに、それまでの自分には思いつかなかったような新しい視点から物事を観察する力、すなわち「課題発見力」を養い、さらには「創造力(新しい価値を生み出す力)」の発揮につなげることができるようになる。

異文化を知ることで、世の中には多様な考え方が存在することがわかってくるし、物事を複眼的にみるのが可能となる。文化が異なるということは、いずれが正しいかということとは別である。また、「文明」とは異なり、「文化」は常に変化しているわけではない。むしろ、時代が移り変わっても変化しない点にこそ、文化の存在価値があることも多い。筆者がこれまで担当してきたゼミや講義において、終始一貫して異文化間の問題をテーマとしてとり上げてきたのは、外国語を専門とする教員が行なう意味のあるテーマという理由もあるが、学部を問わず大学で身につけるべきスキルの中に「新しい視点で物事を観察し、課題を発見し、解決方法を見いだす力」が含まれており、それに直結するテーマであるからである。このことは換言すれば、大学の講義やゼミで学んだことを単なる知識にとどめず、自分の視点で新たな知見を見いだそうとする積極的な姿勢

を身につけることであり、これは「主体性(物事に進んで取り組む力)」を備えることにつながる。

異文化について学んだことによって身につけた多面的なものの見方は、他の様々な問題を考える際にも有効性を発揮する。例えば、高齢者問題を考える場合には、その人たちが生れ育った時代について知っている方がよいであろうし、障がい者のことをとり上げる場合には、非障がい者の目線からでは見えないことに気づく必要がある(車椅子に乗ってみるとバリアフリーの必要性が切実なものとして感じられよう)。このような視点から物事を考える人々の努力は、社会福祉や教育の分野における貢献のほか、例えばバリアフリー建造物やオートマチック車(本来は障がい者向け)をはじめとする様々な新商品の開発という形でも実を結んでいる。

ところで、「文化」について考えることは「人間の営み」について考えることであるが、人間社会を外から見ることも時には必要であり、その方が全貌を的確にとらえられる場合もある。今ではすっかりおなじみとなったハイブリッド車の場合、環境に配慮していることが商品の付加価値となり、消費者の意識の変化ともあいまって大いに普及している。自然環境に与える負の影響を少しでも減らすためであり、人間社会の外に目を向けた結果である。また、最近特に目立ってきた、人間居住区域への野生動物の頻繁な出現は、人間界で起こっている農村の過疎化とも深く関わっており、ここからは様々な課題が見えてくる。北海道のヒグマ(エゾヒグマ)のケースをみてみよう。ヒグマは本来「肉食性の雑食」であるとされる。大きな体と強い力をもつ、日本最大の哺乳動物である。北海道の開拓史上においては、時に人が襲われる悲惨な事件もあったが、専門家(研究者、猟師など)に言わせると、他の動物や昆虫も捕食するものの、植物性のエサを中心とするのが本来の姿であるという。警戒心が強く、人間の居住地に近い所に生息しながらも人の目を避けて行動する動物であったらしい。人間は昔から狩猟を行なってきたので、特に人間に対しては用心深いようであるが、近年は様相が異なり、過疎化が進んだかつての農家が点在する村々はおろか、市街地にゴミをあさりに来るヒグマのニュースをしばしば耳にするようになった。人を恐れなくなってきた。異常なことであり、ヒグマとの遭遇による事故も起きている。主な原因としては、

- ・ 人の手で針葉樹林ばかりが増やされた結果、ヒグマなど野生動物のエサとなるドングリやコクワをはじめとする広葉樹の木々が減少していること
- ・ かつては広い範囲で続いていた森林が開発によって途切れてしまったり、新しく道路ができたことによって彼らの本来の通り道が分断され、その行動圏や移動ルートが影響を受けたこと
- ・ 農業人口の減少によって里山が衰退し動物の活動エリアが拡大したこと
- ・ 人間界と動物界の間にあった緩衝帯(バッファゾーン——里山や広い草地など)が減り、動物の生活エリアである森林と住宅地が隣接する状態の場所が多くなったこと
- ・ アウトドア活動の普及によって自然界に人間が入り込むことが多くなったこと
- ・ 自然界でレジャー(釣りやキャンプなど)を楽しんだ人が食べ物や飲み物の残滓(ざんし)、容器や包装紙を持ち帰らずにそのまま置いてくること

などが挙げられる。人の食べているものは動物にとってもおいしいものであり、彼らを人間のエリアに引き寄せる結果となっている。これらの諸変化が人とヒグマとの遭遇を生む原因となり、事故が起こるのである。ちなみに、事故が起こった場合には、現場が属する(or 隣接する)県・市などの行政機関や警察、さらには猟友会や関係するNPO団体間で情報を共有し連携することが望ましいが、現実にはなかなか難しいようである¹¹⁾。人間の世界を外から眺めることにより、人間の営みにおける種々の問題点がうきぼりとなるが、野生動物の生態についての話は興味を引きやすいものであり、環境問題を考えるための格好の材料となる。

6 おわりに

以上、「異文化」をテーマとしてとり上げる意義、「異文化」に関わる様々な問題の具体例とアプローチの仕方、異文化学習によって得た知識が他の領域の問題をあつかう場合にも有効であること、さらにはそれらと「社会人基礎力」養成との関連性などについて述べた。「異文化」に関連する内容は外国語の授業においてもとり上げられることがあり、大学の英語テキストの中にはこれをメインテーマとしているものが以前からみられるが、英語以外の外国語(大学で初めて学ぶ言語)教育においてこれを最初から行

なう必要性は高くない。受講者の動機は多くの場合「〇〇語を学んでみたい」であり、授業では発音をはじめとする基礎的な知識の習得、運用能力の養成が中心となるからである。とは言え、大学における外国語教育は、日本語能力がほぼ完成された年齢の受講者に対して行なわれるものであり、年少者に対するそれとはおのずから手法が異なるはずである。少なくとも、その言語を使用している国(or 地域)や民族、社会事情などについても言及し、学習者に知的刺激を与えてモチベーションを維持できるようにする必要がある。筆者が専門とする中国語であれば、成戸 2008、同 2010 の内容がその一例である。また、中級レベルに進んだ段階では、語彙や文法において日本語とは異なる発想によるものが増え、言語そのものの習得に際しても発想の転換が求められることが多くなる。

このように、教室での講義という制約はあるものの、受講者の意識が少しずつでも変わっていくことを念じて毎年講義を行なっている。受講者とのディスカッションや書かれたレポートなどから筆者自身が気づかされることも多かった。いずれにせよ、受講者諸君が社会に出てからも大学で得たものを生かし、柔軟な姿勢によって自分の力を発揮できるようになることを願う次第である。

注

- 1) 「社会人基礎力」に関する諸概念、大学教育における有用性について述べたものとしては、例えば『社会人基礎力の育成とビジネス系大学教育』が挙げられる。
- 2) 地域差について述べたものに武光 2001、ハイパープレス 2003 がある。性差について述べたものとしてはアラン・ピーズ/バーバラ・ピーズ 2000 があり、脳の働きを通してみた男女の思考パターン、行動パターンについての興味深い記述がみられるほか、同:90-91、115-117、148-150、156-160 は、問題解決に際しての取り組み方にみられる男女差についても言及している。八代・山本 2006 は、感覚・価値観の異なる他者との日常生活における接触事例を紹介・分析している。
- 3) 原沢 2013:31 は、「見える文化」として「ゲーム、アニメ、電化製品など」を、「見えない文化」として「道徳観念、信条、企業管理など」を、「中間に属するもの」として「お葬式の習慣、近所づきあいなど」をそれぞれ挙げている。
- 4) 金子 2005 は、「慈済科技大学」の母体である「台湾仏教慈善事業基金会」の活動について紹介している。
- 5) 例えば、日本人は自分がよく知らないことについてはあまり意見を言わない傾向があるのに対し、フランス人の場合にはどんなテーマでも何かしらの意見を提示する傾向があるようである。この点については『仏検対策準

1級・1級問題集』:171-172を参照。また、アメリカ映画では、中学や高校での授業中に教室で先生が意見を求めると多くの生徒が自分の考えを積極的に述べるシーンが出てくるが、日本ではどうであろうか。

- 6) 「ジョハリの窓」は Luft, Joseph&Ingham, Harrington (1955)によって提案され、それぞれのファーストネームを組み合わせた名称となっている。
- 7) アラビア語の「ハラール」は「許された」の意味。「ハラール認証」を受けた食材には豚肉やアルコールは含まれておらず、鶏肉・牛肉・羊肉なども決められた方法で処理されているが、統一的基準はない。
- 8) 「M型組織」のMは「mechanistic(機械論的)」、「O型組織」のOは「organic(有機的)」の略である。塚田 2013:26-30 は、上記の二つの組織形態を比較しながら日本企業の職場マネジメントの特徴、女性の活躍推進への影響について論じている。
- 9) 下から上への決定プロセスにおいては、いわゆる「ほうれんそう(報告、連絡、相談)」をはじめとする日本独自のコミュニケーション方法が物事の決定を円滑に行なうために不可欠とされる。『異文化コミュニケーション・ハンドブック』:174を参照。
- 10) 小此木 1979:27-31 には、様々なストレスのタイプおよびストレスの度合いを数値化したデータが示されており、徳井 2002:30-33、原沢 2013:58-59 には、異文化の中に身を置いた場合の適応過程を表わす「Uカーブ(U字曲線)」が紹介されている。
- 11) クマ(エゾヒグマ・ニホンツキノワグマ)の生態、人間との遭遇による事故および対策、野生動物の生態変化と環境との関わりなどについては、ステイーヴン・ヘレロ 2000、高槻 2006、三浦 2008、坪田・山崎編 2011、姉崎・片山 2014、木村 2015、田口 2017、羽根田 2017、米田 2017、同 2018、日本クマネットワーク 2012、同 2016 などを参照。

参考文献

- 姉崎等・片山龍峯 2014. 『クマにあったらどうするか』, ちくま文庫。
- アラン・ピーズ/バーバラ・ピーズ著, 藤井留美翻訳『話を聞かない男、地図が読めない女 男脳・女脳が「謎」を解く』, 主婦の友社(2000)。
- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編 1997. 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』, 有斐閣選書。
- 小此木啓吾 1979. 『対象喪失』, 中公新書(11版 1989)。
- 金子昭 2005. 『驚異の仏教ボランティア 台湾の社会参画仏教「慈済会」』, 白馬社。
- 木村盛武 2015. 『慟哭の谷 北海道三毛別・史上最悪のヒグマ襲撃事件』, 文春文庫。
- 齊藤毅憲・佐々木恒男・小山修・渡辺峻監修/全国ビジネス系大学教育会議編著『社会人基礎力の育成とビジネス系大学教育』, 学文社(2010)。
- ステイーヴン・ヘレロ著/嶋田みどり・大山卓悠訳『ベア・アタックスII クマはなぜ人を襲うか』, 北海道大学図書刊

les:University of California Extension Office.

(原稿受理年月日 2018年12月5日)

- 行会(2000)。
- 高槻成紀 2006.『野生動物と共存できるか 保全生態学入門』, 岩波ジュニア新書。
- 田口洋美 2017.『クマ問題を考える 野生動物生息域拡大期のリテラシー』, ヤマケイ新書。
- 武光誠 2001.『県民性の日本地図』, 文春新書。
- 塚田聡 2013.「日本企業における職場マネジメントの特徴と女性活躍推進」,『季刊 政策・経営研究』2013 vol.2, 三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 23-30頁。
- 坪田敏男・山崎晃司編『日本のクマ ヒグマとツキノワグマの生物学』, 東京大学出版会。
- 徳井厚子 2002.『多文化共生のコミュニケーション 日本語教育の現場から』, アルク。
- 成戸浩嗣 2002.「ことばと社会」, 愛知学泉大学コミュニティ政策学部編『コミュニティ政策を学ぶ』, 愛知学泉大学出版会, 113-119頁。
- 成戸浩嗣 2008.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み」,『コミュニティ政策研究』第10号, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所, 91-105頁。
- 成戸浩嗣 2009.「コミュニティ政策学部学外研修講座 —『フランスのコミュニティを知る』、『トンキラ農園と浪合小・中学校』—」,『コミュニティ政策研究』第11号, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所, 109-123頁。
- 成戸浩嗣 2010.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み(2) — 中国と日本 —」,『コミュニティ政策研究』第12号, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所, 111-126頁。
- 成戸浩嗣 2017.「愛知学泉大学『国際人基礎力養成講座』 — 慈済科技大学における“Service Learning”への参加 —」,『地域社会デザイン研究』第5号, 愛知学泉大学地域社会デザイン総合研究所, 47-58頁。
- 日本クマネットワーク・公益財団法人東京動物園協会 公開シンポジウム『日本のクマを考える 繰り返されるクマの出没・私たちは何を学んできたのか? — 2010年の出没と対策の現状 —』報告書, 日本クマネットワーク(2012)。
<http://www.japanbear.org/cms/>
- 日本クマネットワーク 2016.『鹿角市におけるツキノワグマによる人身事故調査報告書』。
<http://www.japanbear.org/cms/>
- ハイパープレス 2003.『「県民性」知られたくないホントの話』, 青春文庫。
- 羽根田治 2017.『人を襲うクマ 遭遇事例とその生態』, 山と溪谷社。
- 林吉郎 1994.『異文化インターフェイス経営 国際化と日本的経営』, 日本経済新聞社。
- 原沢伊都夫 2013.『異文化理解入門』, 研究社。
- 米田(まいた)一彦 2017.『熊が人を襲うとき』, つり人社。
- 米田一彦 2018.『人狩り熊』, つり人社。
- 三浦真悟 2008.『ワイルドライフ・マネジメント入門 野生動物とどう向き合うか』, 岩波科学ライブラリー(岩波書店)。
- 八代京子・山本喜久江 2006.『多文化社会の人間関係力 実生活に生かす異文化コミュニケーションスキル』, 三修社。

Luft, Joseph&Ingham, Harrington(1955) *The Johari Window :A graphic Model of Interpersonal Awareness*. Los Ange-